

## ■ はじめに

情報経済学の大家、今井賢一橋大学名誉教授が今日の資本主義社会と情報社会をどうとらえているのか、「資本主義の再構築と情報ネットワーク社会」と題する大変興味深い講演会が5月27日、日本経済研究センターの主催で開催された。それは1時間に満たない短時間のもものではあったが、今井先生の思索が凝縮された深遠なものであり、筆者など到底その真意を伝えられるものではないが、めったに得られない機会でもあり、将来への大きな教訓を含んでいると考えられることから、意義深い今井先生の問題意識や所見の一端を紹介したい。

まず先生は、総論的に、金融工学によって、収益を切り刻んで分割した上、誰が誰にお金を貸しているのかわからないような金融資本主義の状況が作り出されているのは、金融資本主義の生きづまりを示すものであり、これを直すべきだとし、外部性のある変数を取り入れて、外部経済効果をもたらすような経済システムが目指されるべきだと主張され、具体的にどうするのかまでは理解がおよばなかったが、自然資本（Natural の Capital）を明示的に取り入れることの重要性を指摘された。また、最後に、政府にとっては、耳の痛い指摘になるが、かつて経済企画庁が担ってきたような信頼できる将来ビジョンが今はないので、どこかでしっかりしたものを作る必要があるとの期待を述べられた。

## ■ オーストリアン学派などの視点

まず資本主義というものをどうとらえるかというテーマについて、今井先生が研究対象とされたオーストリアン学派に属する経済学者の考え方を中心に紹介がなされた。シュンペーターは「資本主義は生き延びるか」という問いに対し、「生き延びられないが、とって代わるものは社会主義ではない「something else」だ」と答えているが、その内容ははっきりしない。シュンペーターを継いで、今日、多くの経済学者に影響を与えているハイエクは、「カタラクシー」ということを主張した。この用語は、ギリシャ語の動詞から来ているが、それは「市場における多数の個別経済の相互調整によってもたらされる秩序」というほどの意味であり、換言すれば、経済学を、もともとは、敵を味方に迎え入れる、あるいは共同社会に受け入れるという意味を持つカタラザイン（交換）を通じて、ソーシャル化するという概念でとらえるよう提唱した。そして「カタラクシー」こそ経済学の内容を表す最も適切な用語であり、エコノミクスはカタラクシーと呼ばれるべきだとも主張した。この彼の見解は、専門化された仕事を交換することこそが経済システムのエッセンスだ（社会は専門化と交換のシステムなのだ）という考え方に集約されると言える。

次に、合理的楽観主義者ともいえるべきグループの人たちの意見が紹介された。

まず MIT の教授で発明家でもあるカーツワイルの見解であり、コンピューターの発達により、人間の頭脳の回転速度は機械の回転速度にはるかに及ばなくなってしまう。ヒューマン、ノンヒューマン間の格差を縮め、人間が機械を使いこなして行くためには、人間の脳にコンピューターを埋め込み、両者をリンクさせるべきだというのが彼の特異な主張であった。しかし、総じていえば、ディアマンディス、

リンドレーのように、カーツワイルの主張を受けて、「我々は専門化と交換とを結ばばよい」という楽観主義の主張が引き継がれた。今井先生自身も、資本主義が世界に広く受け入れられているのは、それがプロセスを通じて、意図しない普及のメカニズムが内在しているシステムだからだとの見解を述べられた。

## ■ 資本主義の新たな精神

ところで、資本主義の精神を説いたことで有名なのはマックス・ウェーバーであるが、今日、大企業の精神がプロジェクトとネットワークに反映するという事は、もはや当たり前のことであり、資本主義を捉えなおした事にはならないであろう。今井先生に言わせれば、資本主義の捉えなおしのポイントはDIY=do it yourselfであり、今では誰もが技術を安価に活用できるようになっていることであり、これを誰もがプロジェクトやネットにつなげてゆけるということが資本主義の新たな精神になるということである。身近にいる普通の女性が水循環のシステムを研究し、少額の資金で誰にも負けないおいしい野菜を育てる技術を開発した事例を目の当たりにしたが、これを見て、次の段階で、いろいろな援軍が現れて、ひいては、これが経産省の輸出プロジェクトにまで引き上げられたり、また、今井先生は真鶴でオリーブの木を植えるNPO活動をしているが、京都に在住されていたときのご縁で、中小機械金属メーカーが立ち上げた「京都試作ネット」というNPOに、このオリーブの実を絞る機械を作れないかと提案すると、ネットワークに繋がり、いつの間にかいろいろなアイデアが出てくるというのが今の資本主義社会の姿なのである。

## ■ 資本の概念を広げる

資本主義における資本の概念であるが、ピケティの資本概念は狭すぎるように思われる。金融資本(Financial Capital)、工場資本(Manufactured Capital)、人的資本(Human Capital)はもちろん重要であるが、このうち工場資本は、今やデザインの付加価値の方が大きく、これこそが重要な論点であるにもかかわらず、明示的にソフト価値が評価されないことが多い。情報の価値も同様であり、主観的に価値が決まり、経済モデルで言えば双方独占のモデルが妥当するため、具体例で言えばお布施と同じく取引関係者の力関係を通じて価値が決まってくる。同じく、今は曖昧に扱われている自然資本(Natural Capital)を包括的・明示的に資本概念に加えるべきである。国連はこの課題への取り組みを開始した。GDP統計に、木材、キノコの生産が含まれるなら、その元本のナチュラル資本がバランスシートに加わるのが当然である。日本では、先祖が全国いたるところに「みち」と「もり」の間に里山を作り生活の糧とした。これこそ典型的な自然資本であろう。里山資本主義という言葉も生まれている。そして自然資本も他の資本と同様、放置し、手入れを怠れば当然劣化してゆき、生産や成長に影響する可変的な生産要素である。

これに関連して、今井先生は、経済は自然から学ぶことが多いとして、ジェイン・ジェイコブスの著書「経済の本質—自然から学ぶ」を挙げた。具体例として、分化と結合による発展と共発展、エネルギーの多様・多角的な利用による拡大、活力自己補給による自己保存を示されている。ジェイン・ジェイコブスは、都市は整然と設計される必要はなく、ナチュラルに発展し、混沌としているからこそ意味があると主張して有名になったが、ナチュラルを重視するという意味で、この著作は彼女の都市論とも繋がっている。

## ■ 情報ネットワーク社会の進化

最後に今井先生は、情報ネットワークの進化について言及された。グローバル経済の進展に伴い、距離にほとんど関係なく伝達・輸送される情報という財の有用性が顕在化しているが、しかし同時にインターネットでは獲得できない情報を **New Argonauts** といわれるような人たちが、たとえばインドとシリコンバレーの間を **back and force** (いったり、来たり) して、有用な情報を媒介するというようなネットワークが必要になっているのが今日の状況であると主張される。ここで **New Argonauts** とは、元来はギリシャ神話に登場する宝物を探す海賊船にのった人 (国家の規制から離れ宝物を探してあるく人) のことであり、ここでは、しょっちゅう、交流して **face-to-face** の情報を得ている人の比喻である。余談だがインド人とシリコンバレーとの交流は密度が高く、日本人がある時期、シリコンバレーに関わっても、交流を継続する人が少ないのとは好対照である。

資本主義システムの裏側には必ず情報ネットワークがあり、距離に関係なく情報を送れるが、しかし、あるレベルまでいかないと、インターネットと異なる生きた情報は得られないのであり、**face-to-face** の情報に勝る情報は本当はないのである。ちょっとでも離れた場所において、本質からちょっとでも離れた視点に立つだけで、それは得られなくなるという。微妙な論点のようだが、高度化した情報ネットワーク社会での重要なポイントとして **Annalee Saxenian** の新著「**The New Argonauts**」の中から、今井先生が引用した言葉が以下である。筆者の拙い感覚で言うと、濃密な対話とそこから生まれてくるバザールのようなごちゃごちゃした密度の高い専門化した交換市場こそが資本主義社会のビジネスインフラをより強固なものとするという警告だろうか。

*“There is nothing that can replace the chance-encounter, face-to-face discussion between business people from slightly different areas, from slightly different perspectives.”*

(荒井 俊行)